

佳作

私だから見える、感動の景色

鹿児島県 鹿児島県立鹿児島中央高等学校二年 安田 湧

感動とは、特別な出来事の中だけにあるものではない。私にとっての感動は、昨日の自分より少し成長できた瞬間にそっとやってくる。小さな進歩を感じた瞬間、それが何よりも大きな喜びだ。

そう思えるようになったのは、生まれた瞬間から、私がある試練を背負っていたからだ。

私は、先天性気管狭窄症という難病を抱えて生まれた。気道が極端に細く、このままでは呼吸ができないと告げられ、生後まもなく大きな手術を受けた。その後も三年間の長期入院が続き、幼い私は長い間、外の世界から切り離されていた。物心がつく前のことなので記憶はほとんどないが、家族の笑顔や病院の方々の温かさは私の心に深く刻まれている。この体験が、のちに「当たり前前の日常」への強い憧れにつながっていった。

退院後、幼稚園に通い始めても、私は周りの人と同じようには動けなかった。走ることも、声を張って歌うことも、少しの運動でさえも息が切れた。小学校に入ってからも、運動も勉強も友達づくりもうまくいかず、「このまま一

生遅れたままなのか」という不安が、心の奥に深く刻まれた。

そんな私に寄り添ってくれたのが、幼稚園の年中から始めたピアノだった。ピアノは練習すればするほど上達する。毎日夢中になって取り組んだ。弾ける曲が増えるにつれ、ますます自信がついてきた。それと同時に、他のことにも挑戦する意欲も湧いてきた。小学校三年生の頃には、できることが少しずつ増え始めた。読書感想文が初めて賞に選ばれ、校内放送で朗読したとき、胸が高鳴った。二分の一人式や卒業式ではピアノ伴奏者に出され、みんなの歌声を支える喜びを知った。それから「できないこと」よりも「できること」に目を向けるようになった。そして気づいた。私の毎日は、小さな一歩が集まってできている。みんなにとっては当たり前のことだが、私には努力してやっとできることだった。だからこそ、できた瞬間の感動は何度味わっても色あせず、毎日が新しい宝物のように感じられた。すると、不思議なことに、苦手なことも少しずつできるようになっていった。

中学校でも、合唱コンクールや卒業式で伴奏を務めた。体育は「ずっと入院していたから仕方ない」と割り切り、周りができることができなくても落ち込まなかった。その代わり、自分なりの目標を立て、小さくても確実に前に進むことを大切にされた。勉強もコツコツと積み重ねた。そうして一歩ずつ歩んだ道のりは、誰かにとっては小さ

く見えても、私には宝物のように輝いていた。

高校受験を乗り越え、今は学校生活を心から楽しんでる。英語ディベートクラブに所属し、得意な英語を磨く毎日。派手さはないものの、白熱した討論の熱気や、試合を終えた後の達成感、仲間と交わす笑顔の一つひとつが、私の心を満たしていく。九州大会に出場できた時の喜びは、努力の結晶として胸に刻まれた。そのすべてが、私にとっての確かな感動であり、誇りである。そして今、こうして「当たり前前の日常」を全身で味わえるところこそ、私にとってかけがえのない幸福なのだ。

こうして今の私があるのは、ずっと優しく見守ってくれた両親のおかげだ。焦らず、諦めず、信じ続けてくれた。だから私は何事にも安心して取り組むことができた。そのおかげでできなかったことが徐々にできるようになっていった。命を救ってくれた病院の先生や看護師さんたち、そしてそばで支えてくれた友達にも、心から感謝している。振り返れば、感動をくれたのはいつも「人の温かさ」だった。

この夏、憧れの大学のオープンキャンパスに行った。広大なキャンパス、真剣な眼差しの学生たち、飛び交う英語の会話。その空気に心が弾み、私の夢はさらに鮮明になった。英語力を活かし、将来は誰かを支える立場になりたい。過去に支えられた経験を、今度は私が人のために生かしたい。

感動は、特別な出来事の中ではなく、日々の小さな一

歩にそっと潜んでいる。昨日より少しでも前に進めた瞬間、その歩みを心から喜べることこそ、私にとっての感動だ。誰にも代えられない自分だけの道を歩んできたからこそ、その一歩の重みを知っている。そして「当たり前前の日常」は、実は奇跡の連続なのだということを伝えたい。だから私は、これからも小さな一歩を大切に歩み続ける。これを読むみなさんも、自分だけの一歩を見つけて歩み出してほしい。どんなに小さく見える一歩でも、それは確かに未来へつながっている。だからこそ、今を大切に、自分だけの道を信じて歩んでほしい。